

研推だより 学びを創るあなたとわたしー伝え合う力の育成をめざしてー 第 1 号

研究全体会の設定が遅くなりすいません。いつもながら、ご迷惑をおかけします。
下記は本年度の研究推進計画です。

平成 22 年度（2010 年度）研究推進計画

西宮市立〇〇小学校

（2）研究テーマ設定の理由

学びある授業を対話による協働的思考をともなう授業ととらえ、授業の中での子どもの反応から、思考力、判断力についての理解を深めていきたい。

また、本年度も引き続き大阪大学文学研究科臨床哲学の本間直樹准教授に指導を受ける。総合的な学習や教科等に対話を取り入れた単元開発、授業の子どもからの反応から読み取れる思考力等について示唆をうけたい。

2. 研究内容

（2）具体的研究内容

- ①研究テーマにせまる授業を創造する。
- ②外部からの研究者とともに、単元を開発する。
- ③研究授業を通して、具体的な子どもの様子から、考えの育ちについて理解を深める。
- ④地域の方とのつながり、地域の施設を活かした単元の開発をする。

（3）具体的検証方法

- ・研究全体会で、対話ある学びの単元開発、協働的思考について外部の研究者から指導助言を受ける。
- ・研究授業、授業協議会で子どもの学ぶ様子、反応から協議を通して検証する。
- ・単元開発を進めながら、各クラスの子どもの様子を交流して子どもの考えがどのようにつくられているのかを検証する。

この推進計画にのっとって
今回の全体会は本間先生を迎えて
行います。

今の 6 年生が 3 年生の時から、チーム里浜の方々との浜についての環境体験学習を始めました
去年の 3 年生からの引き継ぎで、それぞれの体験活動のつながりがなかなか持てなかったという
ことを受けて、今年の取り組みが始まっています。

チーム里浜の方々には本校でのこの取り組みが 4 年目になります。その方々とのつながりをもっと
持てないかと考え、体験についての感想を子ども達が交流する授業に里浜の方に参加して頂く。
そして、子ども達の話し合われたことに感想等を話してもらうという授業を行います。

同じ体験したことをクラスという大勢の中で対話することにより、出される子どもの発言を記録し、検証をする。そこから何が大切なのかをみなさんで考えたい。

6月30日(水) 5校時 「〇〇浜調査隊」3年生全クラス 公開授業

15:00～ 研究全体会 本間先生を迎えて

(雨天で、午前の体験活動が中止されて場合は、5校時の研究授業は中止します。研究全体会は、15:00から行います。内容はお知らせします。)

今回は、3年生の子どもたちの環境体験活動を受けての授業です。地域の方であるチーム里浜の方々と第1回目の体験活動となります。午前中の体験活動を終えて、クラスのみんなでその活動を振り返り、言葉にして分かち合います。その分かち合いに里浜の方々が一人ずつ各クラスに参加されます。

①分かち合いで出される子ども一人一人の言葉について、教師がどのような評価をするのか？

②クラスのみんなで話し合い、分かち合うことにどんな価値があるのか？

③地域の人である里浜の方も一緒に子どもの話し合いを聴いて頂き、意見を話してもらうことはどうなのだろうか？

以上3点に注意をして、授業を参観してみてください。研究全体会では、子どもや地域の方の発言について話し合うことにより、知見を得たいと考えています。

下記は、前回の研究全体会で本間先生が提案されたカリキュラム案です。参考にして下さい。

学年 ／目標	問いかける (知的関心・批判的思考)	感じる (感性・共感)	コミュニケーション (聴く・話す)	協働する (ケア、共同性／地域への関わり の広がり)
三年 環境学 習	(2) 香櫨園浜で見つけたこと、疑問に思ったこと、感動したことを言葉にする ex. 「どうして香櫨園浜にはいろいろなものが流れてくるのだろうか？」	(1) 香櫨園浜に出かけ、自然や風景についていろいろなことを感じる	(3) 他の人が関心を持ったこと、疑問に思ったこと、発見したことを聴き合う。	(4)・(3) についてみんなで協力して調べてみる、その結果分かったことをみんなに伝える ・地域の人に香櫨園浜について質問したり、自分たちの考えを伝えたりする ex. 「香櫨園浜がこんなになったらいいなあ・・・」

研究授業で、何か気になる子どもや地域の方の発言をひとつでも見つけて下さい。それを持ち寄って、研究全体会で交流しましょう。裏面にも記録枠あり

組	名前	発言記録

※今回は、3年生は全クラス公開をしてくださいます。感謝です。今回の授業を足掛かりとして、1

年間の子どもの発言を記録し、検証をしていく予定にしています。

第3学年 総合的な学習指導案（略案）

〇〇小学校 3年

A・B・C・D・E

1. 日時 2010年(平成22年)6月30日(水)5校時

2. 場所 3年1組・2組・3組・4組・5組

3. 単元名 「〇〇浜ちょうさたい」

4. 単元のねらい

○校区にある〇〇浜の現況を調査し、浜のよさを知ったり、浜の抱える課題について考えたりしようとする態度を育てる。

○自分たちの暮らしとのつながりの中で、自然との共存や、保護についてできることは何かを考え、できることから実践しようとする態度を育てる。

○地域の人との交流を通して、地域みんなで支えあって生活していることに感謝し、地域に貢献することのすばらしさを感じる心を育てる。

5. 指導計画

第1次 〇〇浜ってどんなところ？

第1時：オリエンテーション(総合1時間)・・・5月6日(木)4校時まで

- ・1年間を通して浜の調査隊になることを知る。
- ・浜について知っていることを出し合う。(昨年の3年生の発表・浜たんけん・家の人といったことなど)
- ・浜でどんなことを探し、見たいかを話し合う。(例：鳥・植物・魚など。ごみ。訪れている人の様子。何があるか。)
- ・浜で見つけたもの、場所をあとで発表できるように覚えておくこと。

第2時：浜の様子を見に行こう(総合1時間・校外活動)・・・5月6日(木)5校時

第3時：浜の課題を出し合おう(総合1時間)・・・5月7日(金)

- ・浜の地図に、見つけたものを書き込み、発表しあう。
- ・みんなの発見から、もっと調べたいことや疑問に思ったことをまとめる。
- ・チーム里浜づくりの人たちの発見と考えを聞き、一緒に活動することを伝える。

第2次 調査しよう〈1学期〉

第1時：チーム里浜づくりの方の事前授業(総合1時間)・・・6月21日(月)

- ・チーム里浜づくりの方との顔合わせ
- ・浜の様子(植物・生物)について学習する。
- ・浜での活動に意欲を持つ。

風車づくり(図工2時間)

第2～5時：調査その1「浜の植物・生き物ちょうさ」(総合4時間・校外活動)

- ・チーム里浜づくりの方とウォークラリーをしながら浜の植物・生物を調べる。

第6時：調査・観察したことを発表しあおう(総合1時間)・・・本時

- ・調査したことや思ったことを出し合う。
- ・チームの方にも聞いてもらい、思いを交流する。

浜の絵(図工2時間)

第7時：調査・観察したことを記録しておこう(総合1時間)

- ・一番伝えたいことを絵と文で残しておく。
- ・1年の終わりにまとめて発表することを知る

第3次 調査しよう〈2学期〉

第1時：チーム里浜づくりの方の事前授業(総合1時間)

- ・浜の様子(野鳥・砲台)について学習する。

第2～5校時：調査その2「浜の野鳥ちょうさ」(総合4時間・校外活動)

- ・チーム里浜づくりの方とウォークラリーをしながら浜の野鳥・砲台を調べる。

第6時：調査・観察したことを発表しあおう(総合1時間)

- ・調査したことや思ったことを出し合う。
- ・チームの方に聞いてもらい、思いを交流する。

第7時：調査・観察したことを記録しておこう(総合1時間)

凧づくり(図工2時間)

第4次 調査しよう〈3学期〉

第1～4時：調査その3「浜のれきしちょうさ」(総合4時間・校外活動)

第5時：調査・観察したことを発表しあおう(総合1時間)

第5次 発表しよう

- ・1年間調べてきたことをふりかえり、発表会を開く。
- ・個人のまとめを新聞にする。
- ・グループのまとめを新聞にする。
- ・自分たちにもできることを何かをチームの方と意見交流する。

6. 本時の流れ

(本時のめあて)・調査したことや思ったことを自分の言葉で発表する。

- ・友だちやチームの方の意見を聞き、思いを感じようとする。

学習活動	留意点
1. 浜の調査で見つけたことを発表する。 ・発見したこと ・おもしろかったこと ・思ったこと ・もっと調べたいこと ・疑問に感じたこと など	・事前にワークシートで個人の意見を書かせておく。 ・班での交流会に全体の発表にするなど、全員が発表できる機会をつくる。 ・席の形などを工夫し、発表者の顔が全員に見えるようにする。(きこえの児童への配慮もかねて) ・友だちの発言への付け足しや疑問など、広がりや深まりを促す発言をとりあげ、評価するようにする。 ・どんな意見でも大切であり、批判はしないことを確認する。
2. チームの方の意見や感想を聞く。	・チームの方の意見は子ども達の発表が途切れた時や大きな疑問に行き詰まった時などに適宜入れるようにする。 ・教師は司会進行に徹する。
3. 次時の予告を聞く。	・一番伝えたいことを絵と文でかくことを伝える。

研究全体会 発言記録

金澤 : 最初に3年生の担任の先生に今日の授業の感想をお願いします。

A 先生 : 何でも思ったことを言っていると伝えて入った。掘り下げられるところは立ち止まるなどをして子ども達で考えが共有できるようにした。先生がどう受け止めるのではなく、まわりの子ども達がどう思うかが大切だと思い、子どもに振ってみた。

B 先生 : 子ども達が意見を出せるように先生は、意見を言わずに拾うだけに徹した。迷走し始めたときは、先生が質問をだすなどして道を示した。浜探検では、子ども達が里浜チームの人に教えていただいたことをよく覚えていて、よい体験学習ができていました。現地体験のあとの事後学習では、いろいろな新鮮な意見が子どもから出て、私もよい経験ができました。

C 先生 : 今年はチーム里浜づくりの方が作ってくれたルールの上から脱却しようということでスタートしました。最初は、3年生だけでいったのですが、解決できないこともあり、それをチーム里浜づくりの方たちに教えていただいて解決してくださったので、子ども達が、もっともっと考えたいという気持ちを持てることにつながりました。うちのクラスでは、ゴミの注目する子が多かった。

D 先生 : 子どもの意見を受け止めてつなぐことに徹した。里浜づくりの人たちとの体験を発表できる子は少なかったが、子ども達が言いたいことは言えていた。チームの人たちが「いろいろ勉強できてよかったね。」と言ってくださったのが何よりうれしかった。

E 先生 : 子ども達がどんな体験をしてきたか、すごく気になったが、発表を聞いてみると、「よくみるなあ」「よく聞いているなあ」と感じられたのでよかった。子どもから出た言葉を（UFOみたい、宇宙人みたいなもの、など子どもなりの表現について）みんなで話し合い、読み解いていく活動をし、最後に里浜づくりチームの方に結論を出してもらった。

F 先生 : 事前に3年生だけで浜へ行ったのが意識を高めていくという意味でよかった。

G 先生 : 今回の授業で里浜チームの方がいてくれてよかった。今までは、個人で新聞づくりという形だったが、どうしてもわからないことが出てくる。それを里浜チームの方が解決したり、友達が解決をしたりするので、子ども達の表情が生き生きしていました。

H 先生 : 草花のことはたくさん意見が出ていたが、風車についてはどうか。風を感じるために風車もっている。(場所によって回り方が違うなど) 意味なくもっていつているのではない。子どもからそういうことについて意見はでたのか。

E 先生 : 風調べの活動が、一番初めの活動だった。「低いところと高い所は回り方がちがっていた。」「浜の真ん中が、一番回りがよかった。」「体の向きで回り方がちがう」「となりの子と回り方が反対だ。」などの意見がでました。

校長 : 「伝え合う力の育成」と照らし合わせて、体験をし、自分達が感じたことを伝え合ったのが今日の活動だったが、質問など意見を交わし合うこともなかった。いったい今日の活動はどういう意味があったのか。

I 先生 : 授業をする立場に立つと「1時間でねらうものは何か?」と考えてしまうが、自分を素直に出したり、楽しんだりするリラックスする空間がよかった。「クラゲがやぶれていた。ビニル袋みたいだった。」の子どもの発言に、A先生は「いい表現だね。」と返されていた。楽しげなやわらかい雰囲気に包まれていた。自分の体験から考えて、子ども達の中に原体験が

つくられたのではないか。友だちや里浜チームの人とつながって体験できたのはとてもよいのではないか。子どもの心の中の引き出しにすてきな思い出として残っていけばいいな、と思いました。

J 先生：自分はどうしてもまとめようとしてしまう。最後には何かを書かせようとしてしまう。C先生のクラスで子どもが子どもを当てていく場面を見たが、子どもから子どもへつながっていくのは、いいなあと感じた、子どもがすごく発表をしていたのがよかったです。B先生のクラスで黒板に掲示された地図に子どもの書き込みがたくさんあって、よく書けているなあと感じました。

K 先生：体験を通して子どもたちに「発表しようね。」と言え、子どもはできるが、友だちの意見を聞きたいと思う児童を育てていくにはどうすればいいのか？と感じた。

C 先生：金澤先生から話しっぱなしの授業をしてほしいと言われたが、本当は、話すだけの時間と、書きながら学ぶ時間の両方を並行して行っただろうなと思う。

H 先生：里浜チームの方がいなければしんどい授業だったと思う。里浜チームの方がいてくれたおかげで、子ども達の学習が高まっていった。知りたいと思うことを知ることができ、ほめてもらえて、普通なら関わってもらうことができにくいので今日の時間はすばらしかった。

L 先生：リラクスムードで進んだ授業だった。子ども達が想像力を働かせて話を盛り上げていったのが、よかった。子どもの中からまわりの人への感謝の気持ちも出てきたのですばらしい話し合い活動ができていた。

教頭：1つのことがつながっていくのではなく、話が次から次へとかわっていき、またもとの話に戻るなどして、面白いがまとめるのが大変だなと感じた。感想を出し合うだけならそれでもいいが、核心にせまる発表・もう少し掘り下げたい発表がでた時に立ち止まってもう少し話し合わなくてもいいのか？と感じた。子どもがせっかく出した意見が、次の活動へつながらないのではないか。〇〇小の子は聞くのは聞くが、自分の意見を進んで出していくことはできにくい。今日の活動は低学年の発表。中学年には中学年の話し合い方がある。人の意見について自分なりの疑問・考えを発表できるように。

C 先生：もっと話し合いたい、調べたいということを里浜の人に伝えておいた。後日の事前学習で教えてもらった。わからないことはメモにとって残しておいた。それを使いながらも今日の体験・話し合い活動をした。

M 先生：決まりきった授業の形になっていないのがよかった。自由に意見を発表し合い、質問もいろいろな角度からできていた。パターン化されていなくて自由に話し合うのができて面白かった。子ども達もすごく楽しんでいるなあと見てとれた。決して、低学年の話し合いだとは思わなかった。中学年なりのレベルの話し合いになっていた。

校長：〇〇浜で環境の学習をするのが3年生の学習。それを研究授業です。体験して感じたことを発表し合うことはできる。言えない子もいるがその子がどう言えるようにするかは教師の留意事項だ。今日の授業では、その子は何を学び、これからどう変わっていけるのかが見えなかったのではないか。

A 先生：言えてない子も、感想カードには書けているので、もう一度時間を取り、「こんなこと書け

ていたね。」など行行ってフォローする。

E 先生：今日は、全員が発表すると言ってやったので。全員発表した。言いにくい子は感想カードを読んで発表した。

D 先生：言えてない子も考え・意見を持っているのでまた時間を取りフォローする。絵や日記を使い、その子にあったフォローをする。

金澤：それでは伝え合う力の育成にならないのでは？

D 先生：「伝え合う力」は今回の授業だけで育てるのではなく、他の授業などいろんな場面で育てるもの。

阪大生：退屈していた子どもはいなかったと思う。自分は心動かされる体験はしてこなかったが、今日の子ども達を見ているとそうではなく、とてもよい体験をしていた。今日は、私も楽しく体験できた。

N 先生：「くらげがやぶれていた」「ビニール袋のようだった」というような発言からも和気藹々としながら、自分なりの発言ができていた。まわりの子どもたちが「そういう言い方もあるのか」と感じられる、伝える力の育成にあっていた。

H 先生：環境体験学習のねらい自体が子どもの心を動かすことにあり、楽しめていない児童がいるのであれば、教師の手が入っていくべき。そういう児童がいるでしょうではなく、どうフォローしてあげるのかがこれからの課題である。

O 先生：言っていることは聞いていればわかる。しかし、個々が心の中で考えていることは教師の側からは、わからない。何を学ばばいるのかもわからない。3 クラスに入ったが聞いている子のリアクションが全く違っていた。その中で子どもがどんな力をつけているのか、学びはしっかりできているのか、楽しんでいない子どもがいるのかどうか、など子ども一人ひとりが今日の授業でどうだったのかを見ていくのが大切なこと。

K 先生：この授業は、「友だちの思いを感じようとする」のが目当て。でも全ての授業がそれでオッケーとはならない。子ども達の発言だけでよい所と、教師が手を入れていかなければならない所がある。若い人にとって、「今日の授業でいいのだ。」と思わせてしまうことはとても危険である。

P 先生：各クラスの雰囲気も話し合っていることも全く違う。見比べるのは楽しいが、どのクラスがいいのか、何が理想的なのかということは分かりにくかった。

O 先生：主題を決めれば、子どもの発言が論点にあっているのか、はずれているのかを見ることはできる。しかし、今日の自由な授業は、ある意味とても難しい授業である。論点がわからないから。授業のまとめをどこに持っていけばよいのかがわからない。

本間：子ども達が言いたいこと、考えたいことから授業をスタートさせたい。と聞いた。里浜チームの方にもこたえられないことがあった。彼らもそれが勉強になる。学校から地域に目を広げると素晴らしいことがおきている。専門家が考えてもわからないことが子どもの疑問の中にある。それをどうわかっていくのかが、科学の出発点。わからないことに対して我々大人がどういう姿勢で立ち向かうのか、それを子ども達に見せてあげるのが大切だと感じた。子どもの発言から

○「私は、浜で見つけた植物は、コマツヨイグサ以外はほとんど「ハマ」がついていた。私

は浜で咲いているのでハマがつくと思った。」それに対して先生は、「ハマのついた花にはどんなものがありますか。」と尋ねられた。それに対して子どもは、「ハマナス」「ハマヒルガオ」「骨のないカニ」「からっぽだった」「カニの殻でいい？」と発言をした。話がとんでしまったのは、教師の発問のしかたにある。では、どんな聞き方をすればよかったのか。介入のしかたが大切。例えば、「コマツヨイグサはどう思う？」など。

○落ちていた缶のくだりがあった。質疑応答が繰り返された。質疑応答は5回も続けば成功である。そのユニットが続くようになれば、大きな成長である。

○教頭先生のサンドイッチの話について 間に話が挟まってくることもよくある。それをどうつなぎ直すのかは、とても難しい。ひとつひとつちぎって解決していく方法は、子どもが発言しにくくなる。うまくつなぐ方法があるはず。それを考えていかなければならない。

○話を聞く時は、ほかの作業をしないことが大切だと思っている。人が話している時は、それを聞く。あるいは、それを質問するのが原則。

○発言できない児童がいることについて。たしかに望ましいことではないが、そういう子がいることが授業にとってマイナスになるとは思わない。感想カードや日記を使うことでまた時間をとってあげればよい。その時には、また、質疑応答の時間もとることを忘れずに。

○今日の授業はたしかにレベルが高かった。何かに論点を絞って話すほうが子どもも教師も楽である。自由な場ほど難しい。

本間直樹コメント

今年は〇〇小学校で総合的な学習の時間と道德の時間全般にわたって、これから助言することになりました。これまでは単発的にあるクラスや学年で、私たちの提案する教案を試行することを中心に進めて来ました。もとより、私たちの参考にする「こどものための哲学」のカリキュラムは、単年度で終結するのではなく、年次ごとに課題をもうけ、順次スキルを身につけて行くように教案が組まれています。

5月の教員研究会で本間・高橋の方から、以下のような概要をお伝えしました。

目標 ・問いかける(知的関心・批判的試行) ・感じる(感性、共感) ・コミュニケーション(聴く、話す) ・協働する(ケア、共同性/地域への関わりの広がり) この4つの目標を、1・2年では、3年では環境学習を通して、4年では働く/仕事をテーマに、5年では美術鑑賞の機会を使って、6年では、最近導入された英語教育に関連して異文化/自文化を学ぶことを課題に、それぞれ進める、というものです。こうした概要のもとに、小学校の先生方と協議を重ね、今年度は手始めに、毎年3年生に行われている〇〇浜での環境体験学習と、5年生の美術鑑賞教育に、以上の目標と課題を取り入れることにしました。

30日は、午前中に3年生全員が浜に行き、地元のボランティア NPO の「チーム里浜づくり」のみなさんに計画していただいたワークを体験した後、午後の5時間目の45分間で、体験を通して感じたこと、発見したこと、思ったことを自由に話す、という授業が行われました。その後、3年生の担任の先生を中心に、教員研究会が開かれ、私も含め全員で、こうした授業の意義について活発に議論しました。

また、私は昨年度のこの体験学習の最後のまとめの部分だけ、見学させていただいたのですが、そ

のときに、資料に載っているようなすでにある知識を学ぶだけであれば、体験学習の面白さは半減してしまうのではないかと、自分たちで発見したことを他者に伝え、その中であらためて知識に出会って行くというプロセスが大事ではないかと、その後の研究会で意見を言いました。

そこで今年は、私からの提案も踏まえていただき、知識よりも先に、まず浜で自由に体験したことをそれぞれが文章や絵で表現し、その結果を教員とチーム里浜づくりのみなさんが協議された後に、チーム里浜づくりのみなさんによる「事前学習」を授業として経た後に、今回の体験学習に臨むという運びになりました。

体験学習の直後に、チーム里浜づくりのみなさんと感想や意見を交換する時間をもつことができました。みなさんは、いままでは、「私たちから、これを伝えたいという思いばかりが先行し、こちらのルールに沿って子ども達が活動する、ということをやってきたが、今回は、予め子ども達は何を感じ、何を知りたいと思うのかを知ることができ、準備もしやすかった。また、事後の授業での子ども達の発言を聴いて、子ども達がどんな風にこのプログラムを受け取ってくれているかを知ることができてよかった」という主旨のことをおっしゃっていました。

長くなりましたので、感想を言い合う授業での子ども達の発言の様子や、それについての先生方の意見を紹介するのは、別の報告にまわしたいと思いますが、体験型学習と対話学習の連携、および学校と地域連携、環境学習、など多くの点でうまく重なって、非常に興味深い内容になったと思いました。

樫本直樹コメント

先日、本間さんから報告がありましたように、この日の3年生は、午前中に〇〇浜で NP0「チーム里浜づくりの方々と体験学習をしたあと、5限目に「感想を言い合う授業」を行いました。私は残念ながら、午前中は参加できなかったのですが、午後の授業を後ろで参観させていただきました。私が見学させてもらった3年2組では、発言した人が次の人を指名するリレー方式でどんどんその日の感想が出されました。「カニがいた」「はじめてバッタをさわった」「砂利で足が痛い」等々。またボラの死骸があつたらしく、そのことに先生が「なぜ死んだのだろう？」と問いかけると、「人が釣って捨てた」「海がきたなくて、ストレスで死んだ」「船がいっぱい油が流れて」など、自分なりの意見を述べていました。本当にとぎれることなく、45分がすぐに過ぎてしまいました。

そして、授業が終わった後、3年生の先生を中心に教員研修会が開かれ、こちらにも参加させていただきました。先の授業には、校長先生をはじめ他の学年の先生も見学に来られており、授業を見た感想から、こうした体験学習の意味などについて、活発な議論が行われました。

この環境に関する体験学習には、「体験したことを言葉にすること」「伝え合う力を育てる」という目的があります。3年生の先生方は、まず子ども達が見たこと、感じたことから授業をつくる、という意図で、この日はとにかく生徒達の言葉をひろう、つなぐことに徹しておられました。そして、この授業を巡って、「言い合う(言い合わせる)だけで授業になるのだろうか」「自分がするには二の足を踏む」「妙にパターン化されてなくてよかった」、など多くの意見が出されました。どの意見も、非難めいたものはなく、言い合うことから伝え合う授業へ、どうしたら繋がるか、について活発に議論されていた印象でした。

途中、「言い合うのはいいが、感想などを言えない子はどうするのか」という意見が私としては特

に印象に残っています。というのも、先生は「きちんと生徒を評価してあげないといけない」し、先生の側も「授業として評価される」という意味で、かなり「評価」という点に困っておられるようでした(特に、今回の授業のような場合に)。ある先生は、「意見が言えない子がいても、文章や絵で表現させるなどいろんな機会を用意すればいいのでは」と発言されていたのですが、私自身は、そうした代換案を用意してあげるよりも、「なぜ言えないか」を考えてあげる方が先ではないか、そして、なかなか言えない子がいるからこそ、今回のような「ただ言い合うだけ」の授業がもっといいのではないかと考えていました。

子どもに限らず、大人でも、微妙なパワーバランスや自己保身(こんなことを言ったら馬鹿と思われるのじゃないか、等)で、なかなか声を出すというのは難しいと思います(実際、この研究会でも、司会の先生が意見を求めてから、活発な議論になるまでかなりの時間を要しました)。子どもも同様なはずで(わかりませんが)、とくに意見の言えない子は、いろいろ考えているはずで(内の姪っ子なんかを見ても)、言葉にするのにいろいろと準備がいるのだと思います。そういう子が言葉にできるのは3学期かもしれないけど、それでも「よい」と言えるような、そういう評価軸の授業があってもいいのに、「先生方の評価軸のスパンは短いな」というのは率直な感想でした。

とはいっても、もちろん先生方は、つねに「意味」や「評価」が問われるわけで、そんな悠長なことは言ってもらえないのだと思います(自分がまだまだ外野から見てしまっているから、そう言ってしまうのだと思います)。そうした「しぼり」を踏まえたうえで、子ども達にとって「体験すること」と「学ぶこと」がどうすればうまくつながっていくのかについて、今後、考えていきたいと思っています。